

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

いたずらもの話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江口, 一久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001820



いた
た
ず
ら
も
の
の
話

247 目のみえない男の窃盗と耳のきこえない男

ある目のみえない男が雌ヤギをぬすんで、たべたことがあった。だれかが家であつている雌ヤギがやつてきて、どんだんあるいていく。目のみえない男は雌ヤギが自分のそばでなにかをたべているのをきいた。わかるな、家であつている雌ヤギだから、にげていかな

い。
さて、男は雌ヤギの足を手でしつかりとつかんだ。男は雌ヤギの喉をかききり、ころして、それをすつかりたべてしまった。

さて、雌ヤギの持ち主がやつてきた。持ち主は男に、「どうだ。アツラーがおまえさんにいいことをしてくださるように。ここで、わたしの雌ヤギをみなかつたか」という。男は、「なんだつて、おまえさんはわたしに喧嘩をふつかけるつもりかい。わかるかな。わたしは目がみえない。ここをあるいているものがなんでもみえてい

るといふのか。わたしにはなにもみえない」といった。
さて、雌ヤギの持ち主は身をひるがえし、いつてしまう。男はかがんで、小便をしている。男は、「あの男は駄目なやつだ。わたしが菌をうごかしているのがわからないのか。わたしがたべた雌ヤギの肉のほか、わたしが肉をどこで手に入れたというのか」といった。

さて、雌ヤギの持ち主は男に、「どういふことか」という。男は、

「いつ王さまが死んでしまったというのか」といった。

さて、男は杖をもつと、ひよこひよこあるいていく。人びとは男をとめようとしたが、できなかった。男は王さまの屋敷のまえについた。男はないている。王さまが、「どうしたのか」という。男は、「だれがはなしているのだろう。王さまみただけれど」という。王さまは男に、「そのとおり」という。男は、「だれそれがやつてきて、わたしに、あなたがずっとまえに死んでしまったといひました。目のみえないものがいつてもいひないことをいわれたので、きいてください」といった。王さまは、「だれそれをよびなさい」という。王さまの家のものたちは、その人をよんだ。王さまは、「おまえさんたちはどうしたのか」という。目のみえない男は、「この人が説明しようとしなくても、わたしがやらせてもらいましよう。この人は、『わたしの雌ヤギをみていないか』といひました。でも、この人がわたしを馬鹿にしていひないのなら、アツラーがわたしにこのようにされたのに、わたしにこの人の雌ヤギがみえるといひのですか。そして、この人が身をひるがえし、いつてしまうとき、この人はわたしに、『王さまが死んでしまった』といひました。わたしがいきている人にうそをつくといひのですか」といった。王さまの家のものは雌ヤギの持ち主をつかまえて、しばつてしまった。雌ヤギの持ち主は牢屋で二晩すごした。王さまは雌ヤギの持ち主の雄ウシを七頭とつてしまったとき。

王さまが雌ヤギの持ち主にはらわせた罰金がどれほどのものかわかるな。

(一九六六年ころ、語り手 ガルアの非フルベ族の男、ガルアにて)

248 しっかりした男と結婚した女

娘は父親とすんでいる。

さて、娘は自分はだれよりもしっかりした男としか結婚しないと
いった。

さて、よろしい、娘と父親はすんでいる。

さて、人びとは、娘に(娘の結婚相手として)だれかをつれてくるようにと
いった。その人は蚊のいる小屋でねて(蚊にさされても、手でたたいて蚊をころさないし)、アリのいる小屋でね、便所で大便をするとき声をだしてはならない(きばるとき、声をだすこと)と
いった。便所にいっても、ウンコをするとき、うなり声をだしてはならないと
いった。

さて、娘は、「よろしい」といった。だれかが、その話をきいた。男がいくが、
いわれたことができなかつた。つぎの人がいっても、いわれたことができなかつた。

さて、あるひとがその話をきいた。男はどうしようもないほど、

要領がよかつた。男は話をきいた。

さて、男は娘のところに行った。男と娘はでかけていった。娘は、「草むらにいきましよう。草むらにいきましよう」という。男と娘は草むらにいった。そこで、娘はすわっている。男は(ウンコをするために)さきのほうにいった。そこにいき、娘に、「わかるな。わたしはきばるとき、声をださない」といった。

さて、男はうまいことをして、きばるとき声をだしてやろうと
している。男は、「わかるな、そこも、そこも、そこもみんなわたしたちの畑なのだ」としゃべりながら、きばって声をだす。娘は、「ああ。そう」という。男は、「そこは、みんなわたしのおじいさんの畑だよな。むこうは、わたしの母方のおじいさんの畑だ」としゃべりながら、きばる。(男はすっかり用をたす。)娘は、「よろしい。おまえさんは、きばるとき声をあげなかつた。いきましよう。おまえさんは、アリのいる小屋でねるの」といった。男はアリのいる小屋でねるために行く。男は木をもつてきて、床におき、その木のうえによこになった。娘がくると、男は体のむきをかえて、娘をみる。娘は男がアリにかまれていないとおもつた。娘は、「よろしい」といった。そのあと、娘は男をおこした。蚊のいる小屋でねるのが、のこるっているだけだ。(男は、蚊のいる小屋でよこになる。)さて、男は娘に、「わかるかな。むかし、わたしのじいさんは、ここを矢でうたれた」とたたいて、蚊をころす。男は、「わたしの

じいさんは、ここを矢でうたれた。けれども、矢はささらなかつた」という。(男はそこをたたいて、蚊をころす。)男は、「ここに矢はささらなかつた。矢をうたれても、ささらなかつた」といいながら、そこをたたき、蚊をころす。ほんとうのこと、男は手で場所をしめすようなふりをしながら、蚊をころしている。娘はそれをして、娘は自分におしえてくれているとおもっている。男がこうすると、娘は、「なんだって、そこをやられたの」というと、男は、「うん」という。男はそのたびに蚊を一匹ずつころす。男は、「ぼくのじいさんは、そこをうたれたけれども、矢はささらなかつた。親父はここをうたれたけれども、矢はささらなかつた。矢で、ここをうたれたけれども、おやじは鎖帷子をきていた。親父は矢をうたれたけれども、鎖帷子をきていたのさ」という。

さて、よろしい、男はおきあがった。男は家にかえってきた。男はその娘と結婚した。その娘をもらった。ほかの男たちは娘を手に入れることができずにいたとさ。

よろしい。このお話も、おしまい。

(一九八三年一月二三日、語り手 アーマドゥ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、近所にすむハウサ族の女がハウサ語ではなすのをきいたという)